

# キャリア・デザインへの招待

## ペンをマイクに持ち替えて

佐 野 真

### Invitation to Career Design

From Writing with pencil to Speaking with microphone

Makoto Sano

### 目 次

1. 新聞記者と先見の明
2. 毎日新聞入社
3. 新聞記者に必要な能力
  - 3-1 事前調査能力
  - 3-2 必ずしも名文家である必要はない
  - 3-3 センスと感受性
  - 3-4 観察眼と鋭い目
  - 3-5 頭の回転の速さ
  - 3-6 記憶力と情報の結合力
  - 3-7 例え話とネーミング力
4. 娘と妻がくれた特ダネ —私のモスクワ特派員時代—
5. ペンをマイクに持ち替えて —大学教授への転身—
  - 5-1 ギャップに悩む
  - 5-2 学生を感動させるエンターティナー
  - 5-3 教師の情熱と学生を信じる心
  - 5-4 まず具体論から始めよう

## 1. 新聞記者志望と先見の明

柳川 先生、今日は本当にこんな四国のホテルの部屋にまで押しかけて恐縮でございます。

佐野 いやあ、僕もメモしておけば良かったんだけどね。ちょっと時間が無くてね。

柳川 いや、大丈夫です。先生の頭の中で整理されていると思いますから。それで、「**ペンをマイクに持ち替えて**」というタイトルそのものは、これでよろしいですか。もうちょっと別のタイトルの方が、よろしいでしょうか。先生の場合はその、新聞記者というお仕事から、大学教授というお仕事に移られたんで、一応ペンをマイクに持ち替えてという**タイトル**にしてあるのですが。

佐野 良いんじゃないですかね、これで。

柳川 宜しいですか。で、白鷗大学論集の次の号で、来年の3月に刊行する予定で、キャリアデザインというテーマで、色々な仕事を経験されてきた方の話をお聞きするということで企画してるんです。それで学生の将来に何か示唆できるようなインタビューにしたいということを考えています。

佐野 なるほど。

柳川 まず、大学生活からお伺いしたいのですが。佐野先生は東京外語大ですよね。外語大で学生生活を送られてて、私の場合は丁度大学紛争の時期だったんですが、先生の頃の大学生活というのは、今と比べてどんな感じだったのですか。

佐野 私の頃も、1960年代の、例の日米安保改正闘争の最中であつたんで、だから日米安保反対世代ですよ。砂川とか、ね。

柳川 ああ、砂川闘争ですね。

佐野 国会議事堂を包囲した樺さんが亡くなった時に居たわけ。私は一応執行委員をやっていましたんで、自治会の。まあそんなに偉い幹部じゃないんですけどね。大学の講堂で、「日米安保に何故反対するのか」ということで、学生の前で演説をしたこともあるんですよ。

柳川 割とその時代の流れというか波というか、それに影響を受けられたほうなんですね。

佐野 東京外国語大学のロシア語というのは、まあ言ってみれば1つのソ連社会主義を信奉しているような奴が多くてね。

柳川 ある意味で、親ソの方達ですね。

佐野 そうというのが多かったですね。それから左翼。まあ一番代々木系なんてのが多くて。かなり学生を勧誘したりですね、共産党に入れとか、色々やっていますね。まだね、ソ連が社会主義の祖国だ、とかね。今思えば幻想なんですけどね。

柳川 ソ連に対する憧れがすごく強かった世代ですよ。

佐野 ロシア語を選んだのも、1956年に日ソの国交が鳩山一郎さんが行なって回復するんですけど、その前の年辺りから、日本から、日本の有名な女性活動家で、名前は忘れちゃけれども、ソ連に入ったんですね。それで、それから謎に包まれていたソ連の実態が分かってきて。社会主義に対する興味というものと、英米の英語をやっているけれどもこれからはしょうがないのではないだろうか。これからはもう1つの超大国を是非見たいという高校生ながらの夢があって。それでできれば当時のフルシチョフ、ソ連共産党の第1書記、ケネディ大統領と双璧だった人ですが、モスクワの方に行って、新聞社の特派員になって、フルシチョフにインタビューしたい、なんていう夢ですね。

柳川 しかし先生、新聞記者になりたいというのは、基本的に高校生の頃から漠然としてではあっても、憧れとしてでも、お持ちだったと考えてよろしいわけですね。

佐野 ええ。これは高校生の高学年くらいから、持っていてですね。それでいろんな本を読んでいるうちに、ソ連に対する興味が湧いてきたんで。それで1年間、高校で図書館の司書をやりながら勉強をして。是非、外語大だったら英米語よりもロシア語をやりたい、という気持ちになったという、ね。

**柳川** ただ先生、ロシア語を選ばれたということは、やっぱり先生の**先見の明**というか、要するにこれからの時代に必要だということで選ばれてますよね。

**佐野** 自分で、あの頃良く先見の明があったなあと思いますよ。

**柳川** そうですよ、私もそう思います。

**佐野** 親にね、親戚とか親はもう大変ですからね。あんな赤い国ね、アカになっちゃうんじゃないとか、ね。親戚なんかは、ロシアって言うただけで、ソ連って言うただけであの頃はもういろいろありましたけど。何となくこう、これからの時代、ソ連とアメリカで、英米語やるよりも、ロシア語をやっていたほうがこれはいろんな面で役に立つなあという漠然たるね、そういう意味では先見の明があったと思います。これが功を奏して、56年日ソの国交回復、鳩山一郎、河野一郎、フルシチョフ、日ソ国交回復交渉が講じられて回復したと。これからはソ連の時代が来るなあという、そういう時代に学生生活を送ったんですね。

**佐野** それで、憧れは**モスクワ特派員になること**だったんですよ。

**柳川** ただその時にですね、佐野先生の周りの御親戚とか親御さん以外の方ですが、学校の先生とか同級生なんかからも、大丈夫かお前みたいな話はあったんですか。

**佐野** ええ。家のすぐ上の兄貴が、年子の兄貴がね、高校の時に社会科学研究会、社研っていうのをやっていたんですよ。ちょっと左翼がかついていたんですよ。だからその本なんか色々ありましたしね。ソ連邦共産党紙とかね、スターリン全集とかね、今は全然駄目ですけども。そういう読書とかをやっていたらしいですよ。だから漠然とながら影響を受けたというのはありますよ。そんな環境に親父とかは育てたわけじゃないんだけど、すぐ上の兄貴がそういう社会科学研究会に入ってたもんだから、それで、それが目に触れた、本箱に入ってたからそれを読んだり見てたりしてたから、漠然とソ連に対する興味が募っていったということですね。

**柳川** **教育には環境が大事だ**という話があるんですけど、基本的にその、

そういう意識が無くても、それが周りに溢れてて、何かそれに触れているうちに親しみを感じていって、そんなに自分の中では違和感を持たずにそちらの道へ進めた、ということですね。

**佐野** そうですね。それともう一つは自分の先見の明で、より好意的に考えれば、自分の将来、自分が将来何をやりたいのかを高校の終わりぐらいから考えた場合に、**特殊なことを**やったほうが良いということでロシア語に絞ろう、と。最後の1年は、外語大のロシア語に入りたいということで絞っていったわけですね。それで新聞記者になって、モスクワに行きたいなあというのも、まあ外語の1年生ぐらいからあったわけですから。

**柳川** それで先生、前にお伺いしましたけれども、こう、新聞記者になられた時も、ロシア語ができる新聞記者が非常に少なかったという話をされてましたよね。それで希望どうりにモスクワに行けた、というような話をされていましたが、そこのところまでは変な言い方ですけど、佐野先生のシナリオどうりに行ったんですね。

## 2. 毎日新聞入社

**佐野** そうそう。毎日新聞を選んだというのも、調べたんですけどね、朝日新聞と読売は、毎年外語大から、一人ぐらい入っているんですね。それで毎日新聞はどうしてか、あんまり居ないので人事課行ったんですよ、自分から。それと大学の就職課行ったらですね、朝日と読売はかなり入っている、と。毎日新聞は、8年間ぐらい入っていない、と。それで先輩が、外語のロシア語の平野さんでした。この人とは僕がモスクワで組むことになるんですけど、訪ねていったんですよ。そうしたら「良く来てくれたな。採りたい」と。「近く各社が、朝日・読売・NHK・共同通信の特派員が2人制になる。」と。「毎日新聞は、僕の下が居ないのだ。」ということで。これは！と思って、**毎日新聞に限る**ということで受けたんですよ。

**柳川** しかし特派員が2人制というのは、まさに神風ですね。

**佐野** そうです。これがなければ、彼は来年、近くモスクワに行くんですけども、僕と組むことになるわけがないということで、後輩を探していた、

と。それで彼が試験問題を出すので、共産党機関紙のブラウダの社説から出すんだということを聞いていたので、それまでのブラウダをずーっと読んでですね、殆ど完璧に近いロシア語で受かったのも、これは僕の戦術というか、朝日を選ばなかった、読売を選ばなかったということですね、8年前行った先輩のその後は誰も外語大から入っていないというところで、そうして平野さんの指導の下に、新聞記者のいろいろなことを教えてもらいました。入った時から、ある程度モスクワ特派員、初めての2人制の1人になるということで、当時の大森実さんっていう毎日新聞の外信部の一時代を築いた人が、部長だったので、後3年後に2人そういう可能性があるということで、当時横浜支局に行かされて。当時横浜にはソ連船が入っていたんですね。まだ日ソの航空機が共同運行時代ですから。港が、ナホトカ経由ソ連っていうのが一般的だったんですよ。だから横浜に行って、港の記者クラブ、港湾記者クラブに配属されて、ソ連船の取材を専門にさせられたんですよ。そういうことがあったんで、ロシア語も、ソ連船に行っては船員と話をしたり、日本にロシアの通商代表が来た時にインタビューとか、初めからずーっとソ連と関わりがあって。

柳川 そうですよ。最初から先生は比較的そういうインタビューとかさせてもらっているわけですよ。

佐野 記者の基本的な警察回り、まあサツ回りですけど、そういう他の取材とかの経験が無くて。半年ぐらい警察に居てですね、あ、1年か。2年目にすぐ港湾記者クラブに配属されちゃったんです。当時横浜支局では、「新人のくせに生意気だ」と。港湾記者クラブは花形なんですよ。だから皆ベテランが居るのに、僕が行ったということで。これもロシア語の得意なことが良かったということですね。

### 3. 新聞記者に必要な能力

#### 3-1 事前調査能力

柳川 じゃあ先生あれですね、僕達の経営学の中でも、独自能力とか、差別化とかニッチとか言いますけれども、完全に競争相手が居ないところ居

ないところへ行くわけですね。それは凄いですね。

**佐野** だから、「調査無くしては発言権無し」というのが僕のモットーなんですよ。毛沢東が言った言葉なんですけども。毛沢東が湖南の農民の調査をやって、そこから農民革命を中心とした毛沢東革命を導いていったということですね。彼は若い頃からずっと農村を調査したんですよ。で、中国では農村から、農村が都市を包囲する農村革命という革命方式だということですね。話が逸れましたけど、「調査無くして発言権無し」ということがありましたんで。まあいろんな意味でも、就職活動でも有楽町まで行って、面識も無い平野さんをおたずねしたら、彼が喜んでくれて、是非君を採りたい、と。

**柳川** 佐野先生、今のお話を伺っておりますと、「調査無くして発言権無し」ということですが、今で言うその、「事前調査」といいますか、「前始末」といいますか、そういうことを学生の頃からやってこられた、と。佐野先生の取材は、基本的に事前の調査をかなり綿密にされてからする、と考えてよろしいわけですか。

**佐野** ええ。そうですね。

**柳川** それも佐野先生のスタイルというわけですね。

**佐野** 新聞記事というのは、かなりのバックグラウンドを持っていないと書けないんですよ。だから日米のいろいろな、ミサイル交渉とか、武器交渉とか、随分やりましたが、やはり、専門外のミサイルの資料を持っていないと、その記事を書いた場合の記事の厚みがでるといえるか、さっと書けるんですよ。

**柳川** わかります。

**佐野** だから足で稼ぐというのもありますけども、調査報道というものは僕は得意なんですよ。だから、足で稼ぐというのも、調査報道をやって、そこからこう、厚みのある記事を書いてというのが一番良い。ただ毎日新聞は、これは新聞社の比較なんですけど、朝日は調査報道が得意だ、インテリが多い、と。毎日足で稼ぐ、と。荒くれ記者だ、と。で、僕が入っ

た時に「君は見たところ、朝日型だ」と。まあインテリじゃないですけど、「毎日の鍛え方に耐えられるかどうか」なんて言われたんですよ。その当時は本当に痩せてましてね、で新聞社に入ってから太りましたけどね。毎日は足で稼ぐ、朝日は調査、と。で、事件の終わった後行って良い記事を書くのは朝日の記者だ、と。山の取材ですとね、遭難が多かった。すると毎日新聞の記者は冬山に一番乗りして、現場をルポするんですけど、朝日の記者は皆帰った後にそれを辿って行って「奢るな山男」という記事を書く、と。毎日と比較するとあれですけども、これは朝日には敵わないなあという面がありましたね。

柳川 わかります。先生の今のお話を伺って、2つあるんですが、1つはその、僕はよく社長さんのインタビューをするんですよ、経営者方々の。夏休みも9人に会って話を聞いているんですが、その時に思うのは、若かった頃と今の自分がどう違うのかというのは、そのバックグラウンドの量なんです。そうすると経営者があることを発言された時に、その発言の意味と前後の繋がりが昔は分からなくても今は少し分かる気がするんですね。それからもう1つは、朝日型と毎日型の話ですが、実は夏休みにミキハウスの社長さんにお話を伺う機会がありまして、彼がそのお父さんの会社を辞めた理由なんです、ミキハウスの社長さんは調査型なんです。それで、お父さんの会社に入って、工場か何かで仕事をしないで全部仕事の流れをチェックして、夜は社員と飲んで、色んな話を聞いて、全体の仕事の流れを変えようと思ったそうです。お父さんはそれを怒りましてですね、まず**荷作り**からやれ、という話で。お父さんは体を動かして仕事をしないと、仕事をしたとは認めないんです。ミキハウスの社長さんは事前に全部調べてからやるんだということで、これは全然考え方が違いますよね。その後ミキハウスという会社は事前の調査というものを凄く重視する会社になっていくんですけども、ですから先生の話でその足で稼ぐということは悪いことではないですけど、やっぱりその、事前にきちんと準備してから行かないと、折角行っても、**大事なことが見えない**ですよ。



**佐野** まあその、殺人事件とか突発的な事件は足で行くしかないですけど、**社会的な背景**がある事件が起きた場合には、その事件にどれだけ鋭く突っ込んでいけるかというためにはある程度、現場に乗り込まなくても書けるぐらいの調査をしなくてはね。毎日新聞の鍛え方は「現場行け」でしたからね。

**柳川** 完全な現場主義ですね。それと研究フォーラムに於ける先生の**コソボ紛争**の話で思い出したんですけど、先生の話ですがコソボの話とかをされる時に、背景にいっぱい持っていて60分話をされますよね。私なんか背景に何も持たずにコソボの話をしたとしますね、俄か勉強で。でも、聞いての方にとっては全然違うと思うんですよ、同じ60分でも。ですから同じような話を、新聞記事を集めてしたとしても、どこからでも質問してこいというような形の話にはならないんですよ。

**佐野** ですから僕がお引き受けしたのも、ユーゴスラビア、特に東欧のユーゴスラビア、ポーランドは僕が一番取材をしていて、一番共感を覚えた国だったんですよ。思い入れがあるんですよ。だから僕は引き受けてね、言わせてもらえば、もう**万全たる自信**があったわけですよ。だからコソボの、ユーゴスラビア、ポーランドについては、庶民の襲まで、まあ臆げですけど色々ありましたかね。ポーランドとユーゴスラビア民族については、民衆の肌の色から何から知っているということで、自信があったというか、ね。まあその時に調査といいましたけど、これはやっぱりポーランドとユーゴスラビアを、自分で10回以上渡って長期間滞在して、私的取材したから彼らの気持ちが分かるし、セルビア人の民族的な感情も、西側のセルビア人に対する感情も知っていますから、そういう点では、**西側の見方と違うセルビア人論**もできたわけで。それでこの間僕がお話したのは、そういう僕の背景があって、話した結果ですね。

**柳川** まあ本当に良くいうことですけども、「地に足が着いた」というか、非常に良く分かって話をする、と。外側からちょっと眺めて話をする、というのとは大きな違いですよ。

### 3-2 必ずしも名文家である必要はない

**佐野** まあポーランドとユーゴスラビアのことについては、私は文章が上手くはないんですけど、文章が上手ければコラムニストになってますけど、文章が上手くないんで。ただ、ポーランドとユーゴスラビアの記事については、名ライターと言われている先輩が居るんですが、モスクワ特派員の時に一緒にやった支局長は、2代目の支局長は吉岡さんっていうんだけど、ソウル特派員で、韓国で活躍した特派員なんですけど、彼は毎日新聞きっての名ライターでね。いわゆるライターっていうね、本田さんとか、朝日のそういう。吉岡さんとは、モスクワで2年半一緒に居たんですけど、唯一彼が、非常に昔気質の人ですから、「君、浪花節が上手いな」と。これは、まあ名文だったよってということだったんですけど、そう誉められたことが2度あったんですけど、それがユーゴスラビアとポーランドの記事だったんですよ。だから彼が如何に名ライターであっても、僕にはユーゴスラビアとポーランドの背景があるから厚みができて、文章はそんなに上手くなくても**心を打ったんだ**な、と、だから新聞記者論になりますけども、僕はライターはそんなに必要ないと思う。真実のね、**魂の入った記事が書けるかどうか**、僕がよく新人記者、外信部長の時も、僕が段々と先輩になっていった時に、魂の入った記事、これだと思って書いた記事の時は、名文よりも優れている、と。というのが僕の考えですけどね。決して卑下はしてないですけど、ライターになれなかった言い訳じゃないですけど。

### 3-3 センスと感受性

**柳川** 名文家というのは僕の理解では、ある事実があった時に、それに対する何と言いますか、ラベルの貼り付けと言ったら失礼ですけど、ある表現方法が巧みなんですね。ただ今その魂の入ったという時は、いろいろなものを眺めた時に、いろいろな事実を見た時に、そこから**拾い出してくる**わけですよ。その拾い出してくる時の**感受性**、**センス**というものは大事ですよ。

**佐野** センスというのは、これは新聞記者でも必要なんですよ。これはあ

る程度持って生まれたものでもあるけど、鍛えても出来ますけどもね、僕は名文家じゃないけど、だけど先輩に、「君、センスが良いな」って言われたことがあるんですよ。これは最も嬉しかったですよ。**瞬間の頭の回転の速さ**と、**背景**を持ってですね、如何に記事でハッとさせるかというのは、センスがあるかないかは大きいですね。

**柳川** 僕らでもそうですよ。大学で研究していますけど、**研究テーマの設定**というのはセンスですよ。これは学会とかそういうものを追いかけているだけでは駄目なんですよ。「皆やっているから」と安心しているのではなくて、先生がおっしゃったように、誰も気付いていないような、波頭が丁度こう…、というところをパッと気がついていかななくてはならないんですね。これはもう、基本的に研究者もセンスですよ。ですから本当に**研究テーマを見付けられるかどうか**、要するに文章が凄いかということとは別に、ね。それを掴んで、自分の物が書けるかどうかですよ。

**佐野** そうですね。だから僕が何気なしに「良い記事だな」って言われたのはね、ポーランドで通訳に来ていた女の子が居たんですよ。ヤンカーっていうんですけどね。そのヤンカーっていう女の子が、もう何十年も前ですけど、その子が付いてくれたんだけど、笑顔あるんだけど、若いのに、若いんだけど皺があるんですよ、額に。おかしいなあと思いながら、その「皺の謎」ということで彼女に聞いていったら結局、ワルシャワ蜂起、1944年ですけど、ワルシャワ蜂起になったドイツで両親が捕まって、施設に送られて、アウシュビッツで殺された、と。彼女はそこから一緒に逃げた伯母さんに助けられて。お姉さんもアウシュビッツで殺されたかもしれない、ということで。それで彼女は、アウシュビッツに色んな、犠牲者の遺品があるんですけどね、小さな靴があつてね、彼女はそれを見る度に「お姉さんのものじゃないだろうか」と涙が出てくるといいますよ。僕を案内した時に、彼女の皺から涙が出てきたんですよ。それで彼女のことを取材して、彼女の背景が解ったんですよ。それを「**ヤンカーの皺**」ということで、喫茶店で話を聞きながら、淡々と書いたんですよ。そうしたらそれは、名

佐野 真

文でも何でもないんですね。**真実のもの**ですよ。それでその名文家の吉岡さんに「浪花節が上手くなったね」と誉められてね。

柳川 でも、あれですよ、しわを見てね、そういうことを感じる、それは、大きいですよ。

佐野 うん、そうだね。彼女のしわから始まったというのがね。

柳川 一人の女性のその悲しみの中に、**普遍的な悲しみ**がこう、出てくるわけですよ。

佐野 自分ながらね、「俺もセンスが無くはないなあ。」なんて思ったりしてね。ふふふ。

柳川 それはセンスありますよ。

佐野 文章というのは、名文じゃないよ、と。**魂のこもった、背景のある真実**を書けば、名文に勝るといふ、ね。

### 3-4 観察眼と鋭い目

柳川 そうですよ。ああ、これはいい話ですね。いや、学生にしてもですね、多分ですね、仕事の現場でそういう風なセンスが必要になってくる時が来るんですよ。いろいろなプロジェクトか何か仕事を任された時にね。その時に、そういうものを持てるかどうかというのは、これはですね、僕の理解では、当然勉強も要るんですけど、普段から非常に**観察眼**を鋭くして見ておかないと、いけないですよ。

佐野 そうです、そうです。だから、新聞記者とか作家というのは観察眼ですよ。鋭い目をしていますよ。川端康成なんていうのは、僕はずっと後になって会いましたが、すごい鋭い目をしていましたよ。

柳川 そうですよ。

佐野 ソルジェニーツィンも、モスクワで会いましたが、やっぱり作家というのは鋭い観察眼でしょ。だから電車に乗っていても、つり革につかまっけていても観ているんですよ。

柳川 あれは、とにかく、何を見ても何て言うんでしょうかね、**捉える目**をしているんですよ。

### 3-5 頭の回転の速さ

**佐野** だからよく、毎日新聞の記者でもね、鍛える時に、「現場へ行って、一目300行」と。現場へ行って、一目で300行を瞬時に書かなければならないんです。雑感や、何かをね。そうして書くには、鋭い観察眼を持っていないといけないんです。だからね、そういう点ではね、毎日新聞の記者はね、朝日とかと比べて強い、と。現場主義だからね。一目で300行、鋭い観察眼を持っていないとね。これは作家でも同じだと思うんだけど。そこからね、どうやって書いていくのか、というね。松本清張も、すごい鋭い目をしていますね。

**柳川** 私の好きな城山三郎さんや高村薫さんもですよ。一目300行といいますけど、ダーっといきますね、それで、行った所を見て、瞬間的に拾い出して、それを**頭の中で文章化する**訳でしょう。これは大変な作業ですよ。ね。

**佐野** そうです。だからそこでね、かなり良い記者と悪い記者といものが完全に分かれてくるんですよ。だから、これはすごいなあという奴が、現場へ行くとわかってくる。それは同時に、一目300行書くということはですよ、**頭の回転の速さ**がなければね。頭が良いという事ではなくて。新聞記者は頭が良い必要はない、と。頭の回転の速さだ、と。それをいかに文章化して、それを捉えて背景も感じながら書くか、という、ね。

**柳川** わかりますね。

**佐野** だから、回転の速さとセンスと、これが優れていれば、新聞記者はかなりいける、ということなんで。まあこれはね、僕もずいぶんと見てきたから、腕の良い記者と悪い記者はわかりますね。

**柳川** これはもう入って若いときにわかりますか、もう。

**佐野** わかりますね、これはもうわかります。それからね、マイクでね、即座に送らなければならない時もあるんですよ。それも文章化した上で、ハンドマイクで送れるとね。うーん、うーん、とうなってしまうと駄目なんです。ある程度文章化しないと。それも試されるんですよ。だから

僕は**頭の回転**の遅いのは嫌いなんですけれども。非常に厳しいですよ、僕は。

柳川 ただ先生あれですね、ウチの学生なんかはですね、それだけで判断してしまうとですね、隠れてるのが居るんですよ。ノロいけどコツコツやるという学生が。

佐野 それはね、新聞記者でも居ると思いますね。それで、採用試験のときにもうね、頭の回転が速いのは皆採ってしまおう、と。だけどね、やっぱりね、最初のころは発言しないけれどもぼそぼそと言っているような者でもね、良いんですよ。それで、ちょっとあいつも採っておこうということで採った記者が凄い分析記者になるんですよ。だからこのごろはね、社会部の現場のキャップをいれてね、面接なんかをやると、「あいつ良いなあ、あいつ事件記者になると良いよ」なんていうのではなくてね、今度は朝日型の分析記者をゆっくり3年ぐらいたったら凄い良い記事を書く、というのを採ろう、と。誰も居ない時、さっと行ってぱっと黙って持ってきた記事がものすごく良い、と。「あいつセンスがあるなあ」って。だからわからないですよ。だからこれは僕も反省してるんですよ。案外僕がゼミ生なんかを見ていても、2年生のころは駄目でも、3年生ぐらいになると能力を発揮してくるのがいますからね。

柳川 教育はやっぱりそういうところがありますからね。

佐野 だから、最初から判断してもわからないですね。

柳川 そこのところはマイクから持ちかえて回転の速さよりも持久力ということですよ。

佐野 今度は新聞記者から教育者になりましたからね。

### 3-6 記憶力と情報の結合力

柳川 先生そのですね、良い新聞記者とか記事の事は分かったんですが、先生ご自身はですね、新聞記者というのは比較的時間が自由になりますよね。

佐野 ええ、なりますね。

**柳川** その時に当然飲んで、ノコミュニケーションなんかもされたんでしょうけど、当然情報のインプットをされるわけですね。これはもう新聞社というのはそういうものがあふれているから新聞社の中だけで済むんですか。それとも何処かに出て行って話を聞いたりするんですか。

**佐野** やっぱり聞いたりしましたね。それから**本も読みました**よね。かなり本も読んで。自分の専門についてはもう、ソ連、東欧については**あらゆる本を読む**、というね。

**柳川** 先生はその専門以外の所でどの程度の広がりを持たせていくのかということは、どの様に判断されていくんですか。例えばそのさっきのミサイル記事とか、航空記事とか、専門の事はその都度集めるということでしたけれども、それは取材が決まってから勉強するんですか。それとも普段からですか。

**佐野** いや、決まってからですね。決まってから、我々とすれば過去の記事ですよ、いろんな面の**切り抜きと、英文のニュース、埋もれているアナリストの解説**と、そういうものをどんどん送ってきますから、スクラップしてまとめておいて、それを繰り返し繰り返し読むんですよ。僕らはそうやっていって同時に**記憶力**がないと駄目なんですよ。瞬間的に、あと15分位の間に米ソのミサイル交渉がどういう背景を持って行なわれているのかという事をバーっと要約しなければなりませんから。そういう点では、資料ばかり追っていても駄目なんですよ。

**柳川** わかります。頭の中にしまっておいて、頭の中で検索しながら記事が書けないといけないんですね。

**佐野** ここに関連記事があったな、といことを覚えておいて、ね。そこから事件があって、ミサイル交渉があった時なんかには、それを読むんですよ、夜帰ってきて。何回も何回も読んで、頭に入れておいて、で、記者会見に出ていく、と。それをやらないとわからないですからね。で、あとは瞬時に書かなければなりませんから。そういう点ではもう、本当に記憶力が必要だなあ、と。幸い僕も、語学が好きだったんで、記憶力が悪い方

ではなかったのですね。

柳川 そうすると先生あれですね、1つはですね、さっきのその**センス**が要りますね。それからその**観察眼**。鋭い目が要りますね。その他に**記憶力**。この記憶力というのは要するにあるデータを短時間で頭の中にきちんと整理して、検索して、それを記事の中に活かしていける能力だという風に考えてよろしいわけですね。

佐野 ええ。

柳川 それで、基本的に新聞記者の能力というのはある程度分かれていく、と。

佐野 そうですね。

柳川 わかりました。

### 3-7 例え話とネーミング力

佐野 僕はいわゆるライターというものはあまり必要じゃないんじゃないか、と。ライターといわれる人は、これは**生まれつき**です。作家的素質がありますよね。僕らがどんなに取材しても、ライターといわれる各社の有名なライターにはかなわないですよ、これは。表現力というかね。何とかな、**例え方**が上手いんですよ。文章というものは例え方が上手くないと、なかなか厚みというものがでてこないんですけど、それを生まれながらに持っているんですね、そういう点では。僕はそれを凄いなって思ったのはね、香港をね、書いていたね、僕が尊敬するライターだったんだけど、中国は非常に閉鎖的な社会だったんだけど、「香港は中国の鼓動を知る耳だ」と。こういう書き方で始めているんですよ。こういうことのセンスには、こりゃ参ったなあ、と。そういう意味では、**例え話**が上手くて。そうすると文章を読ませますよね。

柳川 そうですそうです。これはね、僕は自分で研究者になって感じていることですが、会社ヘインタビューして、社長さんに話を聞きますね。それを何ていうんですか、「今の話はこういうことですか」という形で、言い換えてく、**言い換え能力**が必要になってくるんですね。あることについて、



名前をつけたりラベルを貼ったり、具体的な例をあげたりとかいう能力が要るんですね。

佐野 柳川先生も得意ではありますよ。文章なんかを見ていても、ネーミングがね、良いですよ。ネーミング、例えば話なんかが上手いっていうのは、ライターと呼ばれる人は生まれつき持っているんですよ。

柳川 僕の場合は元々あるわけじゃなくて、その割と文学が好きで、読んでいるからでしょうよ。

佐野 柳川先生が時々僕に送ってくる文章でも「これは」と思いますよ。ネーミングがうまいなあ、と。

柳川 あれはきっと、「文学青年崩れ」だからですよ。お恥ずかしい話ですが僕は和歌なんかも作ったりしていますから。文学論なんかも読んでいるんですよ。だから、それが多分あるんですよ。生意気言いますけど昨日ちょっと電車の中でいくつか歌を作ってきて、あの、よく作るんですよ、旅に出ると、日記代わりに。だからそういうのがあるんですね。そういうのも文章を書く時に必要だなあとと思いますね。それで、学生に分かり易く伝えるときには、あるネーミングをして伝えなくちゃいけないですからね。

佐野 いまやテレビ時代ですから、講演とか何かでも、上手い人と下手な人では、最初の例え話、ネーミングが違いますよね。新聞や、テレビは見出しから、ですからね。我々のように新聞記者なんかだと最後まで読んでくださいというのがあるんだけど、今の時代は、TV時代になると、ネーミングと、新聞の見出しで上手くやらないと惹きつけてこないんですよ。

柳川 続かないんですよ。すぐ興味が移ってしまいますからね。活字で書く方は、不利ですよ。

佐野 そうですね。そういう点ではね、センスというものは要るなあ、と思っているんですけどね。

#### 4. 娘と妻がくれた特ダネー私のモスクワ特派員時代ー

柳川 だから、あれですよ、新聞記者にしろ学者にしろ、文献を調査するのが得意な方と、実地でのフィールドワークが得意な方と分かりますよ

ね。これはもう持ち味なんですね、その方の。ですから、佐野先生のお話を承っておりますと、要するに佐野先生の場合は、「取材力」、良い記事を書くための能力の束をいくつか身に付けられて。それは、「生まれつきだ」と言われますけれども、勉強の部分も大きいと思うんですね。それで、このことは大変良く分かりました。学生にも参考になると思います。それで、前に教員談話室で伺った、モスクワ特派員時代のお話なんですが、赤ちゃんのミルクを探していて、発見した特ダネがある、と。それから奥さんが、「あなた何か変だわよ」と言ったときの話をもう一度お聞かせください。

**佐野** これはあの、1971年なんですけどね、ソ連はアメリカとのミサイル競争で、ソ連の方がまだ有利だったんですね。アメリカが宇宙にいく前ですが、ソ連の3人の宇宙飛行士が、そうソユーズでしたよ、ソユーズ型ロケット、これで3人が、あの、宇宙服に穴が開いてですね、結論的になりますけど、3人が死んでしまったわけですね。それで、死んだまま下りてきたんですけど。大失敗の世界的ニュースだったんですけど、それを、僕はいつも朝の午前6時にモスクワで生まれた**次女のミルク**をもらいにロシア人の列に並ぶんですよ。それが一番栄養があると言うので。で、午前6時前に家を出たところ、ロシア人たちが「我が国の悲劇が起こった」と。ロシア語で言うわけですね。宇宙飛行士が死んだと言っているんですよ。それで、「どうしたの」と聞いたら、「ニュースでやっている」と言うから、すぐミルクを抱えて、帰って東京に電話を入れたんですよ。そうしたら、日本では6時間の時差ですからね、夕刊ギリギリですよ。まだ午前6時というのは、**通信社もまだ寝ている**ですよ。だから僕が、**世界的特ダネ**になったみたいに毎日新聞の大特ダネで一面トップで「ソ連の宇宙飛行士が帰還途中に死亡」という、ね。これは自分が若くてですね、午前6時に起きれる、まだ若さがあるって、モスクワで生まれた次女の健康を守るために、そのロシア人のミルクもらいの列に並んだということがね、「早起きは三文の得」という諺がありますけど、大特ダネになったという話があった。

これはかなり、賞を頂いたという、ね。

柳川 次女さんにとっても大きな思い出でしょうね、これは。

佐野 そうだね、これはね。だからモスクワで生まれたというのは珍しいんですよね。**モスクワでお産をする**というのは、そんなに多くないんですよ。あえて僕も選んでですね、女房の親戚がみんな祈ってましたって言ってましたよ。モスクワですごい冒険だったんだけど、まあそれが2番目の娘の話なんですけれども。それと、妻の話はですね、これは日本航空が落ちた時の話ですよ。1972年です。日本航空がモスクワ空港で離陸後に墜落して36人ぐらい死んでしまった「**日航機モスクワ墜落事件**」があったんですよね。その時にこれは、モスクワでは大変な社会的事件なわけですよ。で、東京からも応援がきたりして大変だったんですけれども。落ちた明くる日にですね、皆空港に行くんですけれども、2日目ぐらいだったかな、現場へ寄せ付けないんですよね、ソ連は全部、現場の日航機の周りには。だから、写真が撮れないんですよ。で、僕はちょうど空港へ行く道が2車線あるんですけど、そこでこう、女房が私にね、ずーっとモスクワ空港詰めをやっていたもんですから、**おにぎり**をにぎって持ってきてくれて、車でくる途中の山の上でロシア人たちが手をかざして「見える見える」とやっているのを見たというんですよ。それで、「あなた、山の上で写真が撮れるかもよ。ロシア人たちが見ていたんだから」と。それでも警官がずっといますからね。途中で停めて、ということはできないんですよ、なかなか。だから、誰かと組まなきゃまずいな、と思ったら、NHKの若い来て3ヶ月の記者が、僕の動きを察して、「佐野さん、狙っているんでしょう。私手伝いますよ。手伝いますけど写真を撮るんでしょう。」と。「私は運転が上手い」と。「中央分離帯を乗り越えるから、先輩は山へ登って行って、それで写真を撮ってきて、僕はまた迎えにすぐ来ますから」と。そういう作戦を練ってその通りやって、山を登っていったら日航機の鶴のマークの尾翼がね、白い雪原の上に黒ずんでいてね、望遠で見たらあるわけですよ。それでロシア人が4～5人いたんですけど、そこで望遠構えて36枚全部撮っ

たんですけど、撮れたのは2枚だけ。ふふふ。興奮しててね。絞りも何もね。でも明らかに撮れてたの。すごい特ダネだ、と。それが毎日新聞の、サンデー毎日とか、全部載ったんですよ。そこで、そのかわり若い記者は、9時のニュースで、1枚だけくれ、と。その時の記事も名文だと誉められたんですけどね。

柳川 「白い雪原に黒い尾翼」これは少し不謹慎な言い方かもしれませんが実際に詩的な表現ですよ。

佐野 これは自然に出ましたけどね。

柳川 これは先生のおっしゃるある種のセンスですよ。

佐野 これは東京にいる名文ライター達が「佐野にしては上手いな」ということでね、ふふふ。「白い雪原に黒い尾翼が墓標のように」、これはやっぱり瞬間的に出ましたよね。それはもう白い雪原に黒い尾翼がバーっと出現してきたわけで。まあ、「墓標のように」っていうのは僕らでは「まゆつば」っていうんですけどね、ふふふ。それが2つ印象に残ったことです。

柳川 でもあれですよ、お嬢さんと奥様と、大きな思い出ですね。

佐野 そうだね。家内がそこで夢中で運転していれば気が付かなかったわけで。周りを見ながら運転してたからね。

柳川 奥様もある意味で旦那さんの仕事が良くわかっておられた、と。だからこう、いつも周りに注意しながら、ね。

佐野 周りを見ながら運転していたから「山の上で10人くらいのロシア人が指をさしてたからきつと見えるわよ」と。

## 5. ペンをマイクに持ち替えて—大学教授への転身—

### 5-1 ギャップに悩む

柳川 これはまたハワイに連れて行かないといけませんね、ふふふ。それで先生、最後になってしまって、あと10分くらいで終わりにしますけれども、大学の教師になられてですね、要するに、今後はその、活字を書いて、ということではなくて言葉でですね、学生にいろいろなことを伝えていく、しかもその90分、こう言ったら失礼ですけど、新聞だったら一生懸

命読みたいっていう人が買いますけど、大学は周りが行けといったから来た、とかですね、目的が薄い学生が一杯いますよね。そういう時にその大学教師になられて**驚かれたこと**とか、**新聞記者時代との仕事の違い**とかですね、あるいはその**共通点**ですかね、そういうところで感じているところをお話し下さい。

**佐野** 正直言って、僕は教師になった時に、言ってみれば大新聞社のある程度のエリート記者だったわけけれども、すごい**ギャップ**を感じまして、ものすごく**寂しかった**ですよ。言ってみれば**天下国家、世界**を論じてきて、しかも外信部長をやってきてですね、そのギャップに本当に悩んだんですよ。先生方とも専門が違いますから。講師控え室で浮かない顔をしていることが多かったんですよ。

**柳川** ええ。

**佐野** 副理事長も心配してですね、「佐野さんが元気がない」と。転職して1年間は、この大学へ来て悩みましたよ。あの、自分の華々しいキャリアと。でも、白鷗大学の教授も素晴らしいんですよ。僕なんかを迎え入れてくれたんだから。

**柳川** わかります、学生はその、反応があるのかどうか、つかみ所がわからないですし。しかも先生の場合は、活字になってそれを**何百万人**という人が読むわけですよ。これとその大学の**一つの教室**では、ギャップは大きいですよ。

## 5-2 学生を感動させるエンターティナー

**佐野** やはりそれは、1年目は悩んだんですけどね、それか、2年目ぐらいにね、やっぱりこれは学生達も若い情熱を持った学生ですよ。僕がいろいろな経験をしてきたことを話すと、**目が輝いてくる**ですよ。これはもう救いですよ。輝いてくるし、「先生いい話でした」とか、卒業生なんかでも、「先生なんかで地方の大学へ来てくれてありがとうございます。」とかね。

そういう点では、2年目から学生の目は輝いているし、自分の夢を持つ

ているわけです。だからそう、話をしてもね、感動をするわけですよ。活字を通してではなくて直接訴えられる効果というか、肌で感じてくる、という。だから、僕は自分がエンターティナーになる、と。教師というはある程度**演技者**だな、と。いかに感動させるかという、ね。柳川先生のように立派な学者から言わせるとおかしいんじゃないかという事があるかもしれませんが、ある程度ね、僕は**エンターティナーの要素**があると思っていますんですよ。

柳川 そうですね。大学の講義は私は便覧にも書いてありますけれども、「驚きと発見と感動」があってね、知的エンターテインメントですよ。

佐野 ええ。そうですね。

柳川 ですから、**楽しくなかったら、面白くなかったら駄目だ**と思っていますから。

佐野 だから僕はそういう点ではいろんな物を持っているんですよ。柳川先生の評判を聞いていますからね、面白いそうですね。だからそういう点でも具体的な話をしてあげて、さっき魂の入った記事が感動するといいましたけど、やっぱりね、教室でこちらが主体的にだれてしまったらだめですよ。どんな大学であっても、学生達は若い世代、夢を持っていますから。先生達が**本物の話をしてくれるか、本物の教師として熱心にやってくれるか**、わかると思うんですよ。これはいくら学力が低下してきてるとはいっても、先生が主体的に学生達に良い話をしてやるんだ、と。いい講義をしてやるんだということがなければね。わかるんですよ、学生達は。それは地方の中流の大学であれ何であれ、やっぱり若者というのは夢を持っているし。先生がいい加減にやれば、学生もいい加減になるし。

柳川 そうです、そうです。

### 5-3 教師の情熱と学生を信じる心

佐野 そういう意味では主体的に熱意をこめてやる、やってあげればわかってくれるということがわかってきましたね。

柳川 企業の中でですね、あの一、僕なんかは**共鳴**という話をするんです

ね。シンクロニゼーションですね。要するに経営者のほうが本気になって、こうするんだという話をしないと、下は動かないんですよ。やっぱりその上が**本気になって**「何としても会社を良くしていくんだ」という時に初めて下が動く、と。ですから学生は僕に言わせると変なたとえですけど、犬と同じところがあるんですね。

自分達のことを好きで本当に熱心やってくれているのか、自分のことを嫌いで手を抜いているのか、というのはすごく嗅ぎ分けるんですよ。それであの、情熱を持って一生懸命やっているというのはわかりますからね。ですからそれは学生を見ていると本当によく分かると思います。

**佐野** 私語をしたってね、先生方は反省するべき点があるんですよ。私語をさせちゃうようなね、これは厳しい言い方だけど、それはいかんな、と思う。やっぱり先生がガーっとやればついてきますよ。**人間ていうのは信じないとね**。若い世代を信じてやらないと。そこはこう、大学教師になって1年たって、良かったな、と。直にこう、ふれるわけですから。演技と同じですよ。聴衆ですからね。芝居ですよ。自分が必死で演技をすれば、聴衆である学生はついてくる、と。

**柳川** 僕はだからあれですよ、講義の教案を毎回書くんですけど、今もちょっとこれまで書いてきたやつをまとめているんですけど、1回目の授業の教案を書いていたんですけど、自分では**シナリオ**と読んでいますよ。教案というのはシナリオなんですよ。そこで、変な話ですけど、自分で「白鷗大学のシンガーソングライター」とか言ってますから、ワンマンショーをやるわけですね。

**佐野** そうです。全くそうです。

**柳川** 学生をどうやって**巻き込む**か、ですよ。そう思っているんですよ。

**佐野** 学校へ来る間でもね、ずっと今日はどうやろうか、と考えていたりね。その位ね、集中してやらないとね。

**柳川** 渡辺忠さんは面白いことを言っていましたよ。「僕たちは授業の前に**戦闘モード**に入るんだ」と。戦いをするんだ、と。

佐野 ええ。そうですよ。戦闘と同じですよ。

柳川 そうですよね。先生も同じことをおっしゃってますからね。

佐野 だから終わった時はがっかりですよ。疲れますよ。

柳川 疲れますよね。

佐野 その辺で時々反省がありますよ。今日はちょっといい加減にやっちゃったなあ、と。

柳川 僕もその、体調が悪い時用の話も一応作ってあるんですよ。今日は体調が悪いから、少し簡単な話をさせてもらおう、というね。それから外で雨が降った時の話とかですね、いくつか用意してありますよね。

佐野 それから共通する部分というのはですね、僕が読者を感動させる記事を書きたいということと同じですよ。

柳川 同じですよ。

佐野 もう教室に生のお客がいるんですから。そういう点では同じですよ。

柳川 それはあると思いますね。

佐野 淡々と言ってしまっても駄目ですからね。

柳川 ある種メリハリをつけて。学生の顔を見て、わからないような顔をしている時は、説明を変えなければならないですよ。準備した説明をね。ですからそこはアドリブが要るんですね。

佐野 だからそういう点では、シラバスも良いんですけど、基本的には戦いですからね、あまりシラバスに沿いすぎてもねえ。

柳川 講義が沈滞してしまいますよね。動かしながらやりませんと。生き物ですからね。

佐野 時間内においては、もう戦いですから。シラバスにとらわれすぎずにね、退屈してるな、と思った時は、パッと変えなければならない。そういうところがエンターテイメントである、と。教師＝エンターティナーと。反発する方がいるかもしれませんがね。



#### 5-4 まず具体論から始めよう

**柳川** いやいや僕もそう思いますよ。僕は大学教師としては割と変わっている方なんですけどね。学者的な話をされる先生がいらっしゃいますけど僕はちょっと違いますので。

**佐野** いやでも、柳川先生の評判というのは聞くと良いですよ。

**柳川** 割と具体的な話をするからだと思います。専門的なことをやるんですが、具体例から入って行って、最後に一般的な、普遍的な言葉に持っていくようにするんですね。

**佐野** そうそう、そうですね。

**柳川** 多分その方が、学生にとっては分かり易いと思うんですよ。最初に抽象的な話をして理解しろと言っても、なかなか難しいと思います。私自身のことを考えてもそう思います。

**佐野** 今良いことをおっしゃいましたね。僕も同じ考えなんです。吉岡さんという先輩から教えてもらいましたが、「**具体論から入る**」と。新聞の場合は「**具体一具体**」なんで抽象は要らないんですけども。ふふふ。「新聞は抽象は要らない。具体から具体だ」と。だから具体的な物証の描写から始めろ、と。ポリショイの踊り子さんをインタビューした時に、新人の踊り子さんを紹介する、ニューフレッシュという企画があったんですよ。ポリショイ劇場の新しく合格したかわいいきれいな踊り子さんにインタビューしたんですよ。スーツからきれいな足が見えましてですね、本当に細くてきれいな、カモシカのような、白くて白鳥のような足が、私の目に輝いていた、と。そうやって書き始めて、それで、最後は合格してそのきれいな足で-20℃の中をうれしくて走りまわった、と。そうしたらこの記事は良い、と。具体から具体へと書いてある、と。それで柳川さんの場合は、具体一抽象、と。これはやっぱり学問の世界でしょうから。そこからどういう普遍的なものを導くかということを講義するのが、学校の先生なんですよ。そういうのは一致している、と。だから柳川先生ともね、共通性がありますよね。

佐 野 真

柳川 その、表現者としての、観察者としては共通する部分がありますよね。それから変な話ですけども、「読者を感動させてナンボ」、「学生を感動させてナンボ」という仕事ですよね。

佐野 同じですね。片方は目に見えない読者で、片方は目に見える学生ですからね。エンターティナーの原理論が必要ですよ。そりゃあ90分間大変ですよ。疲れますよ。

柳川 僕も疲れますよ、本当に。それじゃあ先生今日は本当にありがとうございました。こんな所にまで来て長時間お付き合いしてしまいましたが、大変面白くて学生にとっても学ぶことの一杯あるお話を伺わせて頂まして本当にありがとうございました。

#### 資料 インタビュー依頼の手紙

平成11年 9月 2日

佐野真様

白鷗大学論集委員

白鷗大学経営学部教授

柳川高行

謹啓、佐野先生におかれましては益々ご清祥のことと拝察申し上げます。

さて、白鷗大学論集第14巻第2号（2000年3月刊行予定）におきまして、「キャリア・デザインへの招待」という特集を企画致しております。つきましては佐野先生に「**ペンをマイクに持ち替えて**」というタイトルでお話しをお聞かせ頂き（インタビューアー柳川）**こちらでテープ起こし致しまして掲載させて頂ければ幸いに存じます。インタビュー項目としては、次のものを予定しております。**

##### (1)大学生から新聞記者へ

外語大での学生生活

新聞記者を志した動機

なぜ毎日新聞社なのか

ペンをマイクに持ち替えて

## (2)新米記者時代

新聞記者の熟練修得はどのようにしてなされるのか

良い新聞記者の条件

良い新聞記事の条件

どのように勉強したのか

取材方法論

## (3)モスクワ特派員時代

ミルクのくれた特ダネ

妻のくれた特ダネ

## (4)大学教員生活

大学教師になって最も驚いたこと

新聞記者と大学教師の大きな違い

新聞記者と大学教師の共通性

—新しい情報の創造—

はなはだ勝手なお願いとは存じますが、事前に簡単なメモをご用意頂ければインタビューがスムーズに行なえると存じます。

四国での学部長会議の際に宿泊先ホテルにて、インタビューさせて頂ければ幸いです。

敬 具

## 資料の付記

本インタビュー項目は、半年ほど前に教員談話室で、コーヒーを飲みながら佐野先生と30分ほど雑談した折にうかがった話の記憶に基づいてまとめたものである。

(付記)

本インタビューは、1999年の9月12日に四国の徳島市の**四国大学**で開催された**全国経営学部長会議**にご出席のためにホテルに宿泊されていた**佐野真教授**に対して、翌年本学で学部長会議を主催する関係上出席していた柳川が早朝にインタビューを行ない出来上がったものである。文字通り多忙を極める学部長職という重責を担っておられる佐野先生に対するインタビュー企画であったがために、出張先で少し時間のとれそうな時を見計らって、経営学部論集における新しい企画である「**キャリア・デザインへの招待**」のためのインタビューを行なわせて頂いた。旅先で久し振りに少しノンビリとされていた佐野先生には、貴重な時間を割愛して頂いたのにもかかわらず、終始快よくご協力賜りましたことを、ここにそれを明記して心より深謝申し上げます。

本来ならばこのインタビューは、白鷗大学論集の第14巻第2号（2000年3月刊行）に掲載予定であったが、投稿された論考が多数にのぼったため、止むをえず次号掲載とならざるをえなかった。佐野先生本人にはご了解を頂きましたが、ここにそれを明記して関係者各位におわび申し上げるものであります。

佐野先生のお話からは、新聞記者という職業に確実に就けるとともに、職場で自分の最もやりたいと思っている仕事に就くために、通学する大学と専門とする学問を決定することと、企業を選択することの大切さを余す事なく知ることができるだろう。**キャリア**とは、私のなりたい職業（want）が必要としている仕事能力（request）にふさわしい自己の能力（can）を計画的に形成しデザインすることができなければならないことが、本稿を読まれる方々、とりわけこれから就職試験を受けようと考えている学生（1、2年生を含めて）の方々に理解して頂ければ本企画の意図は十分にその役目を果たしたと言えるだろう。

**良い記事**が書けるための条件や**良い新聞記者**の持つべき能力、そして佐野先生自身の**学習方法**からは、実に多くのことが学べると思われる。また

ペンをマイクに持ち替えて

大学教員に転身してからは、何百万人の読者の替わりに目の前の顔の見える学生達に情熱を持って語りかけようといお話からも、教育する側にとり不可欠な**心の姿勢**が伝わってくると思われる。赤ん坊であった娘さんと奥様とのアシストによってスクープをものされたというお話からは、常日頃から佐野先生がどんな仕事をされていたのかを**奥様が十二分に知っておられたというご家族のご様子**がうかがえて私本人にとっては大変興味深いエピソードであった。

本インタビューに於ける小見出しの設定とゴシックの設定とは、柳川の責任においてこれを行なった。

私にとり京都から遠い関西、四国、九州は一度も行ったことのない土地である。一泊することが必要な場所で開かれる学会には原則参加しない(これまでの5回の学会報告は全て東京かその近くである) ことと、飛行機には絶対乗らないということを policy として秘かに掲げているために、四国という遠い土地への旅は生まれて初めてであった。**片道9時間の列車を乗り継ぐ**今回の旅は物珍しいことばかりで多くのことを考えさせられた旅でもあった。列車の沿線沿いに展開する風景は、**日本の自然の美しさ**を満喫させてくれた。私は行きの旅だけで約10首の歌を創った。それくらい風景の美しさは心に沁みた。岡山市から徳島市に渡る瀬戸大橋のローカル線の中では多分生涯で2度と会うことのない高校生やサラリーマン、お年寄りが何事かを語り続け、この人々は、それぞれの喜びと悲しみを背負いながら生きてきたしこれからも生きていくのだという思いに私は捕われた。私の目の前に座っていた2人の女子高生には一体どんな人生が待っているのだろう。そして50歳になった私はこれからどんな人生をデザインしていけるのだろうか。

待別よと 隣に眠る 子らがおらず

手紙したため FAXする夜

(1999年9月12日 ホテルにて)

(2000年5月6日 自宅にて 成稿 柳川高行記)